

■「夢を手にした日」

人類は自然の恵みを利用する技術にとどまらず、巨大な動力を生み出す技術、情報を扱う技術、そして生命の謎にせまる技術といった、環境を大きく変容させる技術を手にしていきます。

＜展示品＞ワットの蒸気機関モデル／ディファレンスエンジン／ワトソン、クリックによる最初のDNAモデル／光から未来へ

■「宇宙から地球を見た日」

人類は宇宙から地球を見る視点を獲得することで、地球の環境をより詳しく知ることができるようになり、未来の地球環境を展望しようと試み始めます。

＜展示品＞ニュートンの望遠鏡／ネーブラ天文盤／万年自鳴鐘（万年時計）／月探査機「セレーネ」モデル／月の石／フット プリント（月面の足跡）／アポロ宇宙服／ローバー シミュレーション（探査機モデル）／小惑星探査機「はやぶさ」モデル／深宇宙探査機「ボイジャー」モデル／ボイジャー・ディスク／土星探査機「カッシーニ」モデル／土星探査艇「ホイヘンス」モデル

■「未来が始まる日」

21世紀における未来とはなんなのでしょう。私たち人類は想像力によって「夢」を描き、それを実現することで「未来」を切り開いてきました。21世紀、人類の「夢」はどこに向かおうとしているのでしょうか。

＜展示品＞Open Sky プロジェクト／コウノトリ プロジェクト／源氏物語復元プロジェクト



グローバル ショーケース

ヒトが生まれた日(1)

トゥーマイ発掘頭骨

トゥーマイ復元頭骨

トゥーマイ上半身復元モデル

2002年、中部アフリカのチャド北部のジュラブ砂漠でフランス・チャド合同調査団によって発見された600万年～700万年前の猿人の頭部。顔面の長さが短く、犬歯が小さい。頭骨から背骨につながる穴の位置から直立二足歩行していたことが解り、額が隆起していることなどがヒト属の直接の祖先、猿人の一種と考えられる。この発見により、人類が類人猿から分かれた時期は、従来の説から百万年以上さかのぼることになる。学名「サヘラントロプス・チャデンシス」。現地語で「生命の希望」という意味を持つ「トゥーマイ」と愛称が付けられた。

ルーシー(320万年前のアファール猿人)

1974年、エチオピア ハダールで発見されたアウストラロピテクス・アファレンシスの化石。全部で52個の骨が発見され、これまでに発掘された古人類の中で、最も古い完全な形のもの。背骨と頭蓋骨の位置関係、背骨の湾曲状態、骨盤の形状、大腿骨の傾斜などの特徴から、二足歩行していたことが間違いないと判明した。また、木によじのぼる習慣も分かり、猿からヒトへの過程を裏付ける素晴らしい発見であった。化石が女性であったこと、および発掘した夜、発掘チームがビートルズの歌「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイヤモンドズ(Lucy in the Sky with Diamonds)」をかけていたことから、「ルーシー」と命名された。



トゥーマイ復元頭骨
© MPFT

ヒトが生まれた日(2)

世界最古の芸術(7万5千年以上前の最古の格子模様)

南アフリカのブロンボス洞窟から発掘されたオーカー(黄土)に刻まれた格子模様。クリストファー・ヘンシルウッド博士(南アフリカ出身/ノルウェー・ベルゲン大学教授)によって2002年に発表された。人類が残した最古の模様で、世界最古の芸術と言われている。オーカーは顔料の一種で、恐らく儀式など象徴的な行為を行う際、化粧をするために用いられたと考えられている。また、模様は何らかのメッセージを持っていたと思われ、この時代、初期のホモ・サピエンスが既に高度な文化やコミュニケーション能力を持っていたことがうかがわれる。

世界最古のアクセサリー(7万5千年以上前の最古の貝殻ビーズ)

格子模様が刻まれたオーカーと同時期の7万5千年以上前に作られた貝殻ビーズ。オーカー同様、ブロンボス洞窟より発掘された。貝に骨器を使って穴を開けたと考えられており、ビーズに糸を通して、ネックレスやブレスレットとして身に付けていた痕跡が残っている。今回、展示されるのは、世界初公開の19個のビーズによる完全なセット。これまで世界最古のアクセサリーは4万年前のヨーロッパのものであったが、この発見により、人類の象徴的行為の起源がアフリカにあったことが示された。



世界最古の芸術
©African Heritage Research Institute
©IZIKO Museums of Cape Town



世界最古のアクセサリー
©African Heritage Research Institute

マンモスが倒れた日

ユカギルマンモス全身復元像

ケナガマンモスは長鼻目ゾウ科に属する哺乳（ほにゅう）動物。約25万～約1万年前に、ユーラシア大陸北部や北アメリカなどの寒冷地に発達した草原に生息していたとされる。氷河時代の終わりと重なる、更新世末期、約1万年前に絶滅した。

今回、ロシア連邦サハ共和国北部の永久凍土から2本の牙を持ち、ほぼ完全な形の頭部が発掘された、約1万8千年前のものとされるユカギルマンモス（マンモス ラボにて展示）のデータをもとに、学術的に正確な全身復元モデルが原寸大で制作された。肩の高さ約2.8m、牙の長さ約3mの大きさと、典型的なオスの大人のマンモスであり、ケナガマンモスのリアルな姿を示す。

※「ユカギルマンモス」は、ケナガマンモスの1個体につけられた名称。

ケナガマンモス骨格と臼歯

サハ共和国北部で発見されたケナガマンモスの実物の前肢、肩甲骨、上下の臼歯を展示します。外形ではわからないマンモスの体の特徴を発見していただきます。

ケナガマンモス牙（触れる牙）

サハ共和国北部で発見されたケナガマンモスの牙をさわれる形で展示します。マンモスを肌で感じていただきます。

都市を築いた日(1)

ソンマ・ベスビアーナの古代ローマ時代別荘跡の学際的調査研究プロジェクト及び出土物について
(女性像／ディオニュソス像／柱頭／ソンマ・ベスビアーナ遺跡復元)

イタリア共和国カンパーニャ州ソンマ・ベスビアーナ市の「ローマ時代別荘遺跡」は、ベスビオス火山の472年の噴火により長い間地中に閉じ込められていた。1930年代に、イタリア人考古学者によって壮大な建築物の存在が確認されており、その頃からこの遺跡は初代ローマ皇帝アウグストゥスの別荘跡ではないかという仮説が唱えられていた。

2002年、東京大学・青柳正規教授をリーダーとする、日本とイタリアを中心とした学術調査チームにより、新たに発掘活動が始まった。この発掘プロジェクトは、この遺跡がアウグストゥスの別荘であるとする説を立証するだけでなく、革新的な方法、学際的な科学的アプローチに拠って、考古学上重要な区域の文化面、環境面の背景を復元するという分野を超えた画期的な試みとなっている。

2003年9月には、ペプロスをまとった大理石の女性像が発見された。ほぼ完全な形で発見されたこの女性像は紀元1世紀頃のものと考えられ、その後の化学分析により紫貝を使って着色されていたことが分かった。台座を含めた高さは約120cmで、丹念な彫刻、気品ある立ち姿はギリシャ彫刻を思わせる。2003年10月に、今度は男性の大理石像の葉冠を頂いた頭部と頸部、胴体部が発見された。さらに、2004年9月には左肩部が発見され、1932年の発掘時に出土していた右肩、右腕、右脚部と合せて一体として修復がなされ、その修復は2004年12月に完了したばかり。この男性像は酒神・ディオニュソス像とされ、台座を含めた高さは約150cm。また、以上2体の大理石像に加えて、コリント式の柱頭も展示される。ベスビオスの噴火によって封印されてから約1500年。眠りからさめたこの遺跡は、時を超えた人間の美への憧憬を垣間見せてくれるだけでなく、将来の火山噴火への備えについても貴重な資料を提供してくれることだろう。

立体大型映像装置・電腦屏風スクリーンによるソンマ・ベスビアーナ遺跡の復元

東京大学学術調査チーム発掘のソンマ・ベスビアーナ遺跡を、立体CGで復元。時間は3分程度で、見学の際は立体で見るため特殊メガネを使用する。ここでの展示装置が他と異なるのは、スクリーンの形が屏風型になっている点。スクリーンがフラットではなく、W字型になっている。

日本ならではの映写法を模索する中、日本では古くから馴染み深いものである屏風に注目した。俵屋宗達や本阿弥光悦や尾形光琳がもし現代のマルチメディア社会に活躍していたら、CGで動画を作りそれを屏風に映していたのではないだろうか。そんな思いから世界初の屏風型スクリーンが制作された。



女性像
写真提供:東京大学



ディオニュソス像
写真提供:東京大学

都市を築いた日（2）

刻字卜骨（甲骨文字）

牛の肩甲骨に刻まれた甲骨文字で、殷の第22代の王・武丁の時代のもの。最も初期の甲骨文字である。文字には朱が施されており、甲骨文の典型ともいえるほど美しい。表面には100余字で、武丁が仲丁を祭ったことや狩猟に出て車から墜ちたことなどを記し、背面には50余字で、雲の動きや虹の出したことを記し、その吉凶を占っている。当時の社会生活や天文現象についての様子をうかがうことができる貴重な資料である。

出土地 中国河南省安陽市殷墟
時代 殷 紀元前14世紀頃
大きさ 長さ32.2cm 幅19.8cm
所蔵 中国国家博物館



禹鼎

鼎は祭祀にあたって供物を盛る器。青銅製の鼎は、当時、身分によってその数が決められるなど、国家の重器として珍重された。表面の文様は腹部に獣面文と波状文を配し、脚部の稜のところにも獣面文をつける。器の内側には20行208字の文字の銘文が見える。内容は禹（人名）が祖先の事跡を語り、それを自らが受け継いだこと、また、武公の命を奉じて、軍を率いて噩を討ち、その君を捕らえる軍功があったことなどを誇らしげに記す。

青銅器の内側に陰文で文字を鑄込む技法は、現在でもまだ十分に解明されていない。こうした漢字と青銅器とが一体となったものは、まさに中国古代文明を代表する文物である。

出土地 中国陝西省扶風県法門寺任家村
時代 西周後期 紀元前9世紀頃
大きさ 高さ54.6cm 口径46.7cm 重さ37.25kg
所蔵 中国国家博物館



都市を築いた日(3)

青花松竹梅文鼎形香炉

青花とはコバルト顔料によって白地に青の絵付けをした磁器で、14世紀の中国で発明された。輸出品は広く世界中で愛好され、各地で多くの模倣品が作られた。この香炉は、殷・周時代（紀元前16～前3世紀）に祭器として重用された鼎の形態を模したもので、松竹梅の吉祥文様を流麗に描いている。

産 地 中国江西省景德镇窯

時 代 15世紀

大 き さ 高さ31.3cm 口径20.2cm 足径12cm

所 蔵 故宮博物院

秘色青磁八稜瓶

越州窯でつくられた若草色の美しい釉色をした最上質の青磁は、唐時代に「秘色」と呼ばれて、宮廷のみで使用が許されたとされる。古来、秘色青磁の美しさを称えた詩は多く知られていたが、その実像は永く不明であった。近年、唐時代の皇帝が寺に寄進した宝物が発見され、その中の青磁によって、ようやく実像が明らかになった。

産 地 中国浙江省越州窯

時 代 唐 9世紀

大 き さ 高さ21.7cm 口径2.3cm 底径7.9cm

所 蔵 故宮博物院

都市を築いた日(4)

青磁三足尊

汝窯の青磁は古来、中国陶磁の最高峰に位置づけられている。天青色と呼ばれる美しい空色の釉色
が特徴であるが、世界で僅か数十点しか現存が確認されていない。この三足尊は其中でも最も美しい
ものの一つである。

芸術をこよなく愛したことで知られる徽宗皇帝の時代に作られ、以後、歴代王朝の宮廷に伝えられた。

産 地 中国河南省汝窯

時 代 北宋 11～12世紀

大 き さ 高さ12.9cm 口径18cm 底径17.8cm

所 蔵 故宮博物院



白磁長頸瓶

中国の白磁の美しさは、古来、雪の白さに例えられ、世界中の人々の心を引き付けた。中でも定窯で
作られたやや象牙色がかった美しい白磁は、最高の評価を受け、北宋時代には宮廷などで盛んに
使われた。この瓶は、繊細な美しいプロポーションを持ち、丸い胴には劃花文と呼ばれる流麗な彫り
文様が施されている。

産 地 中国河北省定窯

時 代 宋 11世紀

大 き さ 高さ22cm 口径5.5cm 足径6.4cm

所 蔵 故宮博物院

都市を築いた日(5)

ぎ がくもんはちりょうきんぱい
伎楽紋八稜金杯

鑄造で作られた金のカップで、側面には琵琶や箜篌の楽器を持つ8人の人物のレリーフが施され、把手の上部には2人の胡人の横顔のレリーフが付けられている。これらの器形や文様や技法には西域からの影響が色濃く見られる。

出土地 中国陝西省西安市何家村

時代 唐 8世紀

大きさ 高さ6.4cm 口径7.2cm 重さ380g

所蔵 陝西歴史博物館

だん か もんきんぱい
団花紋金杯

端正なボディーに、把手はリベットで、図案化された花や雲の紋様の部分は溶接で付けられた金のカップ。胴部の花紋と雲紋は細い金の板や線、珠を組み合わせる溶接したもので、非常に緻密な技術が用いられている。

出土地 中国陝西省西安市何家村

時代 唐 8世紀後半

大きさ 高6cm 口外径6.9cm 重さ230g

所蔵 陝西歴史博物館



都市を築いた日(6)

和同開珎

日本の初期の貨幣である和同開珎^{わ どうかいほう}の銀貨。同は銅の、珎は寶(宝)^{か か かめ}の省略体。何家村^{か か かめ}の甕からは5枚発見されており、玄宗皇帝の開元5年(717年)に、長安に入った日本からの遣唐使が持参したものではないかと考えられている。当時の日本と唐の交流を実証する具体的な遺物の一つである。

出土地 中国陝西省西安市何家村

時代 奈良(日本) 8世紀

大きさ 直径2.3cm

所蔵 陝西歴史博物館

壁画「ポロ図」

この壁画が発掘された墓の主、李邕^{り よう}は、唐を建国した高祖李淵^{り えん}の曾孫。玄宗皇帝治世下の開元15年(727年)に亡くなった。墓は全長57m、レンガ造りの墓室は二つの部屋に分かれ、墓室の四周の壁と墓道の壁に壁画が描かれていた。

左側の白馬に乗る人物は、左手で手綱を、右手でマレット(ステッキ)を握っている。右側の馬は、強く引かれた手綱に、前脚を上げ、たてがみを立て、驚きの目をしている。騎乗の人物は目で球を追ひ、今にもマレットを振り下ろさんばかり。両者の間にある球を奪いあう姿は、馬も人も躍動感にあふれ、当時の絵画の技量の高さをうかがわせる。線の際立った美しさといい、きわめて傑出した唐代絵画である。ポロの起源は、古代ペルシャ説が有力であるが、吐蕃^{と ばん}(チベット)説、中国中原説もある。ポロは、“球”を意味するチベット語に由来するとされ、もとは騎馬民族のあいだで行われた軍事演習を兼ねた遊びであった。唐代には、貴族たちの間でたいへん人気を博したスポーツとなった。

出土地 中国陝西省富平県杜村鎮北呂村

時代 唐 8世紀

大きさ 幅305cm 高さ130cm

所蔵 陝西省考古研究所

